



U-35委員会企画 7th action

「建築と水辺」活動報告

2020年11月3日(火) 9:00～

会場：中之島公園

企画趣旨

COVID-19の感染拡大を発端とした先行きが不透明な全世界。

日本においても2020 TOKYOオリンピックの延期をはじめとしてインバウンド需要の激減などの混乱が続いており先行きが不透明な状況が続いています。

「外出自粛」・「3密を避ける」・「新しい生活様式」など、国から国民の生活に沢山の制約が課されたことで、改めて“同じ時と同じ場所で過ごすことの大切さ”が浮かび上がってきたのではないのでしょうか。

そんななか、注目を浴びているのが「街＝外（そと）」の空間。

新鮮な外気が十分に得られることや、他者との物理的な距離を確保しやすい等、正しく活用された「外（そと）」の空間は非常に魅力的な場所だと認識されつつあります。

大阪の都市空間の魅力として、国内外の人々に絶大な人気を誇っている大阪の水辺空間で、「安全・安心」に「水都 大阪／魅力の再発見」と「With/After COVID-19時代／場の共有」ができる仕組みを、提案しました。

当日の流れ

- 9:00 集合・設営
- 10:00 イベント開始
- 13:00 イベントタイム①
剣先ランウェイ
- 14:00 イベントタイム②
波紋迷路
- 15:00 イベントタイム③
フラフープタイム
- 15:00 イベントタイム④
チェーン the パルーン
- 17:00 撤収・解散



今、街を楽しむということ

●7th actionに至る経緯

前回の2018年度にU-35が企画したactionは「建築とOSAKA」～“愛される”OSAKAの未来というテーマで「6th action」を開催いたしました。

2025年の万博開催が決定し、期待感が膨らむ大阪で、未来の大阪を探るため、外国人観光客の方々に「OSAKAの印象に残った写真を見せてください」と街頭インタビューを行い、世界の目から見たOSAKAの魅力を探るという企画でした。フィールドワークで得た外国人観光客の視点をヒントに、新しい大阪の魅力を発見し、「“愛される”OSAKAの未来」について、多様な立場の人を参加者として迎え、様々なアイデアを生み出す“フューチャーセッション”を行い、大阪の未来について語り合いました。

そこで得られた知見では、大阪の中には、いわゆる観光地的スポット／生活と商業主義が混然一体となった猥雑な情景／整然とした景観／日本的な美しさなど様々な質が点在しており、外国人にも「写真を撮りたい」と思わせる魅力を沢山有している事が分かりました。特に興味深かったのは、ほぼ全ての写真に水景や自然が存在しており、その背景に特色ある都市が立ち並んでいるという点でし

リーダー：高畑貴良志 副リーダー：出来佑也

た。必ずしも有名な観光スポットだけに目を向けているわけではなく、自然（緑や水景）と都市（建築）が融合しているシーンにレンズを向けており、これこそがOSAKAにしかない都市空間の質を支えているのではないかと、改めて気付かされたのです。

●水都大阪の魅力を再発見する

そういった外国人目線による気付きから、改めて日本人である我々も水都大阪の魅力を再発見することが大切ではないかとメンバーで話し合いました。よく水都大阪と謳われますが、街中に張り巡らされた水景は市域を繋ぐのみならず、誘目性という見えない効果によりOSAKAにしかない魅力を支えています。この、「水都OSAKA／魅力の再発見」を通して、水都大阪を未来に受け継いで行くきっかけになるようなイベントが「7th action」では実現できないかと考えはじめたのです。

●COVID-19による開催延期の決断

そんな話をしていたのが2019年の年末でした。例年であれば年度末にactionを行うので準備に取り掛かる時期だったのですが、いざ議論が深まりだした2020年の初め、突如としてCOVID-19の感染が広がり、世界全体の先行きが不透明になってきたのです。日本においても2020 TOKYOオリンピックの延期を

はじめとしてインバウンド需要の激減や、イベントの中止が相次ぎやむなく「7th action」も延期することになりました。

●延期→緊急事態宣言

延期を決定した直後に緊急事態宣言が発令され、メンバーの生活も大きく変化しました。それまでそれぞれの会社に出社することが当たり前だったメンバーも、それぞれの形でリモートワークに移行。月に1回程度行われていた我々の活動もそれまでは一カ所に集まり開催していた会議から、リモート会議での開催に移行していきました。

始めはごちないリモート会議もやってみれば意外とスムーズ。場所にとらわれないので出席率も高まるといったメリットもありました。（もちろん、いつも熱い議論を繰り広げていたメンバーからすると、リモート会議では相手の顔色・声色など、細かな変化に気が付きにくいリモート会議は少しやりにくいといったデメリットもありました。）

●制約をポジティブにとらえる

緊急事態宣言も終わり、感染拡大が一旦落ち着くとメンバー同士での議論が盛んになりました。「確かにCOVID-19は間違いなくネガティブな側面が多い」「しかし歴史を振り返ってみても建築や社会のあり方はこうした社会情勢と密接に関係し、絶えず柔軟に変容してきたのではないかと」「まさに今の状況は、建築と都市を大きく変えることの出来

る、ポジティブなチャンスと捉えるべきではないか？」などとメンバーで議論していました。

また自粛中に、皆の生活に沢山の制約が課されたことで「これまで当たり前と思っていたことが当たり前でなくなり、同じ時と同じ場所で過ごすことの大切さが浮かび上がったのではないかと？」などという意見も出てきたのです。

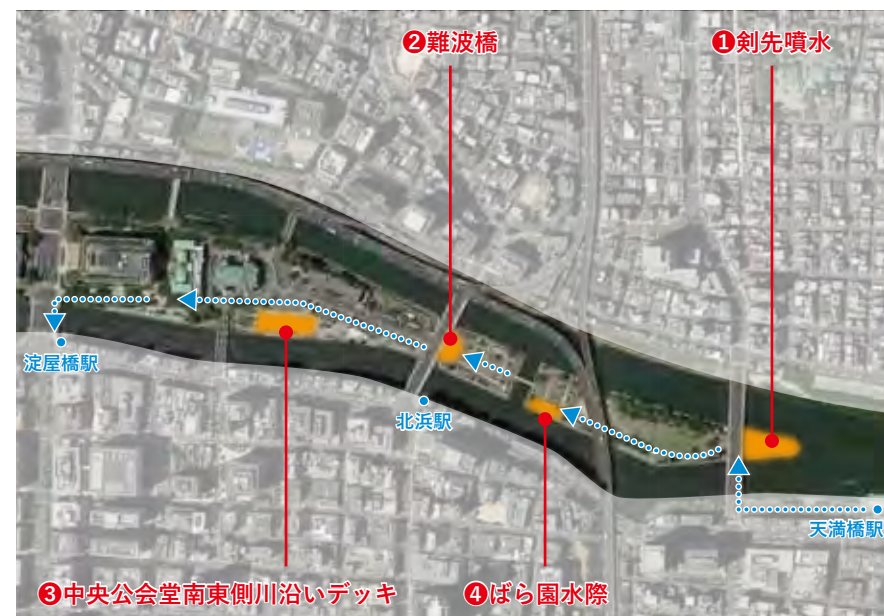
この新しい時代に「安心・安全」に場の共有ができる仕組み作りを行ってはどうかとメンバーで議論し始めたのです。

●注目を浴びる「街＝外（そと）」

そんななか、自然と注目を浴びているのが「街＝外（そと）」の空間でした。新鮮な外気が十分に得られることや、他者との物理的な距離を確保しやすい等、正しく活用された「外（そと）」の空間は非常に魅力的な場所だと考えたのです。

●真価を問われる大阪の水辺空間

先にも述べたように、大阪の都市空間の魅力として、国内外の人々に絶大な人気を誇っていたのが大阪の水辺空間でした。本年の我々の「action」はこれまでの活動で改めて魅力に気付かされた大阪の水辺空間で、「安全・安心」に人々が「水都OSAKA／魅力の再発見」と「With/After COVID-19時代／場の共有」ができる仕組みを、提案することに意義があるのではないかと考えたのです。



「With/After COVID-19時代／場の共有」を促す4つの場

●「With/After COVID-19時代／場の共有」を促す場

舞台は「水都大阪」の中心地の中之島公園。「With/After COVID-19時代／場の共有」を促す場として4つの場所を設定しました。これらの4つの場所を通して、新しい時代に即した街の楽しみ方を提案しました。

① 剣先噴水「水辺カーペット」

② 難波橋「波打つ広場」

③ 中央公会堂南東側川沿いデッキ

「フープディスタンス」

④ ばら園水際「バルーンディスタンス」

詳細は次頁以降で述べますが、当日は各班毎にイベントタイムを設け、通りがかった人々と共に街を楽しむイベントも行いました。

●「水都OSAKA／魅力の再発見」の視点場

また、当日は大阪の水辺空間を歩き回って魅力を発見してもらうための仕掛けも設置しました。視点場にはタグをつけてQRコードで我々U-35委員会の若手建築設計者の目線で見た水都のお薦め情報を発信。これらのビューポイントから街を眺めることで、利用者が新しい魅力を発見する仕掛けも準備しました。

●「今、街を楽しむということ」

当日の活動を通して誰もが積極的に「街を楽しむこと」に対する気付きが得られたのではないかと思います。本記事をご覧になった方にとっても「今、街を楽しむ」ためのきっかけとなれば嬉しく思います。（文責：高畑）



視点場に設置したQRコード

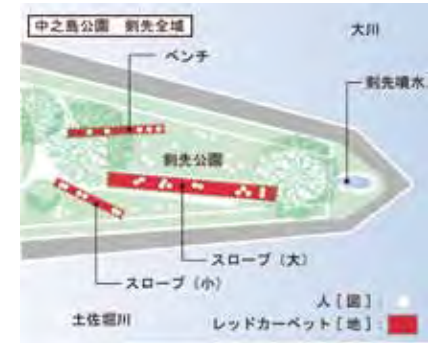
①剣先噴水 [水辺カーペット]

●概要

開放的な都市空間である剣先に景観のアイキャッチとなるレッドカーペットを敷きました。剣先を特徴付ける3本の軸線（スロープ、ベンチ）は普段から多くの人々が訪れますが、そこに赤の絨毯を敷くことで普段とは異なる場を形成し剣先で感じる親水性や開放感といった都市の魅力を再発見出来るインスタレーションを考えました。また剣先のような開放性の高い都市空間では、対岸や橋等多様な視点で人々の距離感を認知することが可能です。レッドカーペットを活用し①②の仕掛けをすることで、それを顕在化しました。そして多くの人々が各々に距離感を保ちながらレッドカーペットに滞在し、剣先でくつろげる居場所をつくるきっかけとなれば良いと考えました。



①ミクロな距離感：レッドカーペットに示した1mのグリッドラインで距離感を測る。



②マクロな距離感：人 [図]とレッドカーペット [地]の関係で距離感を測る。

●当日の様子

「(橋下でレッドカーペットを目にして) えっ、何これ!」、「(物珍しそうに) レッドカーペットを歩くことはなかなかないからね」といったリアクションと共に、アイキャッチにつられて多くの人々が剣先を訪れました。ただレッドカーペットを歩くことに関しては遠慮する人が多く、戸惑いながら歩く様子が印象的でした。くつろぎの場所というよりレッドカーペット本来の非日常的な捉え方をする人が多く立ち入り難くなってしまったのは想定外でした。非日常性を求める好奇心のある人はスロープの先で記念撮影をしたり景色を満喫したりとその場を楽しむ様子が見受けられました。



レッドカーペットが敷かれたスロープ (大) を先端に向かって歩く様子



レッドカーペットが敷かれたベンチの木陰でくつろぐ人々の様子



イベントタイム「剣先ランウェイ」でスロープ (小) を駆け上がる様子

●考察

普段から多くの人々が集まり魅力的な空間である剣先では、インスタレーションを仕掛けることで非日常性を求める人と日常性を求める人が共存する結果となりました。前者は普段の情景との差異を楽しみ、公園の使い方に変化が現れました。後者は刻々と変化する公園風景を楽しみ、普段通りの公園の使い方をしていました。不特定多数の人が利用する公園は日々様相を変え人々を楽しませます。水辺カーペットは日常の空間に非日常性を加えることで多くの人々が場を共有し水辺の魅力を共感しました。それらの体験が履歴となり、今後剣先を訪れるきっかけになればよいと思います。(文責：平岡)

②難波橋 [波打つ広場]

●概要

この場所は東の芝生広場へ向かって散歩をする人、ジョギングに勤しむ人などの様々な人の往来がある場所です。そうしたポテンシャルを持った、この広場に「波紋」模様を描き、人の流れや動き、各々の距離感（ソーシャルディスタンス）を実感し、考察するきっかけを作りました。波紋を跨いだり、波紋に沿って歩いたりすることで周りの人との距離感を感じ、例えば同じ波紋の中にいる人と偶発的な「場の共有」を感じることもできます。また、波紋大階段の円弧やカーブを描いたプランターなど公園の特徴を強調するように引くことで、中之島公園の魅力を再発見に繋がれらると思いました。



各々が自由に公園を往来をしている状態



波紋という補助線があることで、お互いの距離感を顕在化しつつ、一つの場所を他の人と共有していることに気付くことができる。

●当日の様子

「広場の真ん中に線で波紋を描く」という単純な操作を、道行く人がどのように捉えてくれるか不安な部分も多くありました。当日は線を気にして踏むのを躊躇したり、線に沿ってランニングをしたり、何か波紋と連動した人々の活動を期待していました。しかし、結果的に目にしたのは波紋が驚くほど広場に溶け込んだ風景でした。あたかも元々広場に



公園を通行する人と迷路を楽しむ子どもたちが入り交じった空間



多くの方が足を止めて看板の説明を読んでくださいました



イベントタイムでは多くの子どもたちが参加

あった模様だったかのように、多くの人が波紋模様を気にせず通行し、目線の低い子どもたちはいつもと違う景色を気にしている様子でした。一方で、近くに設置していた看板には多くの方に集まってもらえ、中之島公園ができた当時の話や自身のおすすめポイントなど様々な話を伺うことができました。イベントタイムには波紋の線を利用し、巨大迷路を行いました。この時間まで波紋を気にする人がなかなか現れない中、果たしてイベントとして認知してもらえるのか心配でしたが、目印として「START・GOAL」のパネルを掲げた瞬間、「迷路だ!」と反応する人が急に多くなり、イベントスタート時から長蛇の列ができるほどの人気になりました。迷路を楽しむ子どもたちと公園を通行する人々が入り混じった風景は印象的でした。

●考察

結果的に4会場の中で一番日常に溶け込むことができたインスタレーションになったと思います。気付いた人にはちょっとした違和感として感じられ、気付かない人は気にせずに通る抜けができるという絶妙な存在感が、人通りの多い難波橋で受け入れられる一つの要因になったように思います。さらに、イベントタイムでは波紋が巨大迷路という非日常として顕在化し、日常と非日常が入り交じった空間となり、都市の中でのイベントの一つの新たな在り方が見えたようにも思いました。そうした普段は通り抜けるだけの広場も、少しでも立ち止まるきっかけが作れたことで、難波橋の魅力に気付ける機会になったのではないかと思います。

(文責：粉川)

③中央公会堂南東側川沿いデッキ [フープディスタンス]

●概要

敷地は大阪市中之島公園内の中央公会堂南東側水辺広場の川沿いデッキ広場です。普段は水辺の溜まり空間、人通りも少なくあまり活発に使用されていないこの場所に、フラフープによるソーシャルディスタンスの距離2mの可視化を行ったインスタレーション作品を展示しました。

カラフルなフラフープは中之島という都市公園に新たな色どりと与え、非日常の光景を生み出すと同時に、フラフープ・縄跳び・シャボン玉・コマ・けん玉など誰もが子供の時に遊んだことのある遊び道具（おもちゃ）と一緒に並べることで日常的な遊びの広場を提案しました。

それぞれの遊び道具が持っている距離感の体験、それらを使用することによって生まれるコミュニケーションを通して、この場を共有し、中之島公園の新たな魅力の発見のきっかけになればよいと考えました。



通過動線となっている場所に遊び空間を提案



フラフープの中に遊び道具を並べディスタンスを確保

●当日の様子

午前中は人通りも少ないことや物珍しさからフラフープやおもちゃを手に取る通行者は少ないように感じましたが、午後になると、公園に散歩に来た子連れのファミリーや高校生、大学生などの若い人がフラフープやおもちゃを積極的に手に取り、遊び始めてくれました。最終的には、デッキからはみ出て子供たちが思い思いに自由に楽しく遊んでいました。子供たちが遊んでくれることはなんとなく想定していましたが、子供の両親、通りかかの人など、老若男女問わず、このイベントを楽しんでくれていたと感じました。フラフープやシャボン玉など、子供が「やりたい!」と言うのにつられて、お母さんやお父さんも



イベントタイム「フラフープタイム」：一斉にフラフープを回し、各々が自然と距離を保っている様子



広場にて：老若男女問わず通りかかりの人々がフラフープを手に取り遊んでくれました



子供たちが思い思いのおもちゃで遊ぶ

●考察

通行としての利用が多かった場所に、フラフープを床に設置するという、ちょっとした仕掛けで多くの人々が集まり、この場所を活用して頂けたことは中之島公園の使い方に変化をもたらした新たな魅力の発見に繋がったと思います。また老若男女、誰もが馴染みがあり、大人たちにとってはどこか懐かしい、フラフープやおもちゃで遊ぶことを通して、人々の活動や会話が生まれこの場所を共有するといった体験もできたのではないのでしょうか。今、屋外空間が注目を浴びているなかで、中之島公園の新たな魅力の発見にとどまることなく、街中での遊び方を考える契機となればよいと思います。(文責：水野)

④ばら園水際 [バルーンディスタンス]

●概要

公園⇄川⇄都市建物群の連続する水都らしさが現れるばら園の土佐堀川沿いに、風船を用いた参加型インスタレーションを考案しました。まずはその場の特徴を生かすアイテム[①②]を土佐堀川と通路の間の落下防止柵に設置しました。各アイテムの設置間隔は約2mとし、公共の構造物を活用すると同時に場に尺度を与え、人と人の距離感の目安をつくりました。そして来訪いただいた皆様には、一つだけお願いをしました。“佇みたくる場所にブルーバルーン [③] を結え付けて、お気に入りの場所をマーキングして下さい。”①②に不特定多数の手により③が加算されて場が変化し続ける、そして能動的に好きな場所を見つけてもらう事で、いつもより水辺空間に近づき、意識してもらうことがこのインスタレーションの本旨となります。

同時にインスタレーションにより設置されたブルーバルーンは来訪者のお気に入りの場所のマッピングとなり、水辺空間における人々の愉しみ方／集まり方を、風船の密度感／間隔によって履歴化することとなります。とすれば、ソーシャルディスタンスが叫ばれる時勢を表徴するように、キレイな2m間隔でバルーンが並ぶのではないかと少しばかり期待しながら当日を迎えました。

【始めに設置したアイテム】

シルバーバルーン [①] クランピング [②]



※ ①②を交互に2m間隔で設置

【来訪者へのお願い】

ブルーバルーン [③] をお気に入りの場所に結え付けていただいた。



※ 来訪者に提示した図



来訪者の手により設置されたブルーバルーンや水景を手掛かりに、水辺空間を思い思いに楽しむ人々



アートとして遠くからも公園利用者の目を楽しませた



イベントタイム「チェーンtheバルーン」の様子

●当日の様子

予想以上の来訪者で賑わいました。水際で佇むような行為が同時多発的に、そして一定の距離感をもって起きる状態を予想していましたが、実際的には一人一人の滞留する時間が短いため、プライベートな距離感であるソーシャルディスタンスでの場の形成ではなく、水辺にバルーンが浮かぶ少し大きなエリアとして、離れた位置からも眺めて楽しめる場がつけられていました。ブルーバルーンも特段決まった秩序は無く、ランダムに並びました。場の使われ方としては、フォトスポットとして利用されていた方が非常に多かった印象です。風船が浮かぶ風景を撮影する年配の方から、風船を背景に自撮りする女子大生、風船と戯れる子供の姿をスマホで撮るママさんなど、水際に風船が浮かぶ場を「撮る」行為を通して思い思いに使いこなしていただけました。イベントタイムは風船を数珠つなぎにして水際の風景を時間限定で刷新する試みを行

いました。不思議なもので特異な風景が現れると会場に近づく方は減り、少し遠巻きに傍観される姿が増えたことが印象的でした。

●考察

川辺に吹く風をバルーンの揺らぎにより可視化することで建物群としてのスタティックな風景に動きを与え、人々の目を改めて水辺空間に惹きつける、そして新たな魅力を再発見するきっかけになったのではないのでしょうか。同時に、写真を撮りたいと思わせるビジュアルの影響力を感じました。スマホが普及し写真が民主化された今、どの世代でも場を楽しむ感情と撮影する行為が連動している事を実感しました。イベント参加者も通過するだけの方もふとレンズを向けたくなる、そして「同じ情景を撮る」という共通の行為を通して何となく場を共有する、そんな非接触ながらも一体感のある街の楽しみ方・参加の仕方を提供できたのではないのでしょうか。

(文責：立松)

Member's Forum

会員投稿の頁

■U-35座談会

7th actionの座談会は例年と少し趣向を変え、建築や都市空間のリサーチ・ワークショップを行うRAD主宰の川勝氏、水辺のまち再生プロジェクト事務局であり、公共空間の自由使用を謳った「PUBLIC HACK」の著者である笹尾氏をゲストに迎え行った。また会場も、今回のaction開催場所の1つである中之島公園の剣先で開催し、「水辺」を感じながら振り返りを行った。

■7th actionの目的

高畑：6th action「建築とOSAKA」で行ったフィールドワークから、海外の人たちが撮った写真を、後日体系的に整理していったときに、多くの写真に水辺の空間が写っており、やはり海外の人たちは水辺の空間の魅力を自然と感じ取っているのかなと思いました。いざ、僕たちを顧みてみると、大阪にいながら水辺の空間の魅力を感じ切



座談会の様子

れてないところがあると思ったので、そういうところが感じられるような催し物ができないかなと考えたのがまず1つです。もう1つが、もともと4月に行おうとしていたのですが、コロナの影響で延期せざるを得なくなり、なかなかメンバーにも会えない中、やはり場を共有することは大事だねという話を委員会ですていました。今、場を共有できる場所ってどういうところだろうって考えると、やっぱり外部空間なんじゃないかと。このウィズ/アフターコロナ禍においても安全安心に場の共有を図れるような仕組みが提案できないかと思い、その2つを掛け合わせて「建築と水辺 今、街を楽しむということ」をテーマに決め、7th actionを進めていきました。

■それぞれの場所でみられた風景

平岡：剣先噴水で行った「水辺カーペット」では皆さん突然現れたレッドカーペットにすごく遠慮気味で、そこを本当に歩い

ていいのか分らず躊躇している人が見受けられました。しかしその分、このスペシャルなカーペットが強調され、例えば子連れの夫婦が1組だけ、剣先の先端に佇んで景色を眺めることで特別な空間になったり、カーペットの上をまるでランウェイのように胸を張って歩く人がいたり、今までにはない新しい風景が見られたと思います。剣先公園は普段から魅力的な空間ですが、そこに少しイベント性を持たせることで、公園を使っている人に刺激を与え、普段と違った魅力ある風景が創られると考え、このようなイベントが大切なのかなと思います。

粉川：難波橋のふもとで行った「波打つ広場」ですが、ここは普段、ばら園や芝生広場へ向かう人、ランニングをする人など中之島公園の交通動線の要のような場所です。そのため、描いたラインを気にも留めず通過する人も多く、このインスタレーションを感じてもらう人が10人中2〜3人くら



いだったように思います。一方で、子どもの目線でみると「あ！線がある」とリアクションをする場合が多く、目線の違いによって見える世界も違うのかなと感じました。また普段は通行動線としての利用しかない場所に、迷路イベントとして遊び場を提供できたことが、すごく異質なものを挿入するという意味で特異点になったと思います。迷路を気にせず歩く人の間を、迷路で遊ぶ子ども達がジグザグ歩いて行く様は、なかなか面白い風景だったのではと思います。

水野：「フープディスタンス」は中央公会堂の南東にあるデッキスペースで行いました。この場所は普段あまり使われていないような場所ですが、立て看板や無数のフラフープを設置した異様な光景が、場が使われるきっかけになるのかなと感じました。一番良かったのは直径2mもある巨大フラフープです。これを回すところとちょうど2mでソーシャルディスタンスを視覚化でき、また物珍しさに大人も子どももこれを使って遊んでくれました。中でも、上手く回せる女の子が、周りにいた子たちに「こうやんだよ」って教えていて、それもいい光景だなと思って動画を撮ってました。

立松：ばら園水際で行った「バルーンディスタンス」では、公園に来た人に水辺に近づける場所を楽しんでもらうという意味では大成功だったと思います。子ども達が「あ、風船だ。ぼくも風船付けたい」と言って寄ってきてくれて、この場所を楽しんでくれていたのが印象的でした。風船の誘目性は高く、遠くからでも皆さん気が付いて、この場所に寄ってきてくれました。また距離を測る目印として4m間隔で設置した鏡面のシルバーバルーンがなかなか面白く、まわりの都市や、水辺の風景を写し込んで、キラキラしながら漂う様子が一際目立っていました。バルーンで遊んでいる子どもを写真に撮るお母さん、その近くで風船のある景色を見ながら休日のひとときを楽しむ親子、少し離れたベンチで、何気ない会話を楽しむおば様など、思い思いの使い方を通して水辺空間での場の共有が行われていたように思えます。

■イベントスケールとキラーコンテンツ

笹尾：中之島のへんてこなところは、道路から見下ろす場所が公園になっていることだと思います。その視認性が高いところをイベント場所として選ばれていたのも、遠くからしっかり見えるやり方で見栄えがいいなと思いました。しかも仰々しいものではなく、しっかり見ると当然イベントだと分かりますが、身内でやってるものが少し膨らんだくらいの規模感で、参加する人も、気軽に参加できていたことに非常に好感を持ちました。イベントによっては、占用許可をとった占用区域と、そうではない通行の動線を分離してイベントを行うことが往々にしてあります。難波橋横の「波打つ広場」では、2割程度の人しか気付いていなかったようですが、気付いた人が迷路を体験すればいいわけで、8割の人が気兼ねなく歩いている状態の両方が並行して共存出来ている関係がとてもいいなと思いました。「水辺カーペット」は天神橋の上から見た景色がとても良かったですし、「バルーンディスタンス」ではバラ園橋の西側にいた親子が、「風船のとこ行ってみよか」と言って向かっていくってということが起こっていて、おそらく7th actionがあるから行こうっていう人よりも当日来たらやっていたという状況になっていて、誰でも気軽にイベントに参加できる公園の在り方が、凄くいいなと思いながら見せてもらいました。川勝：僕も見させてもらっていいなと思ったのは、イベント1つずつのスケール感が小さいので、とするとただフラフープサークルで遊んでるだけにも見える。その一方で、水都 OSAKAの魅力を再発見してもらう為の視点場の展開や、それぞれのイベントを繋ぐスタンプラリーが7th action全体を構造化している。小さなスケールでそれぞれのイベントが存在していることと、大きなスケールで中之島公園全体を一体的に認識できる視点を作り出しているという点がとても面白いなと思いました。

笹尾：フラフープのコンテンツとしての力も凄かったですね。動きがあり、誰もがやったことがあることだからこそ、キラーコンテンツ化するのかなと思います。川勝：スタンプラリーもとても魅力的でした。

Member's Forum

会員投稿の頁

高畑：川勝さんもまずスタンプ押しに来てくれましたね。

川勝：とりあえずスタンプラリーもらって帰らないと思ってました（笑）。

■風景に馴染み、様々な使い方を許容する

川勝：「波打つ広場」ですごくいいなと思ったのは、気にならない人は普通に通り抜けることができ、気付いた人は地面にある印みたいなものに沿って、いろんな行為を生み出す可能性があったことです。その1つの機能とか、1つの行為に場所が縛られていない公共空間の在り方が非常にうまく浮かび上がっていると思いました。現在の都市は、昔の機能主義のようにいろんな機能を場所ごとに割り振るのではなく、例えばPokémon GOをしている人はそこがどこであろうと、遊びのための空間になっているし、エクササイズのアプリを起動しながら歩いている人は、そこは単なる移動空間じゃなくて、エクササイズのための場所になっている。そういった様々なモードが一つの場所にオーバーラップしていることが特徴であると考えているのですが、そのことがうまく表れているような取り組みで、非常に好感を持って見させてもらいました。

興津：イベントが始まるまでは、皆さんが地面に描かれた線に沿って歩いたり、何か気にするんじゃないかと思ってたんですけど、意外とそうではなくて、気にする人もいれば、いつも通りに動いている人もいるというような状況でしたね。

出来：波紋を迷路に見立てたイベントタイムは子どもたちで賑わいましたが、それまでは仕掛けた側としては不安になるほどシュールな光景でした（笑）。様々な過ごし方や意識の仕方が混在している状況を許容できる空間を作れたという意味では、良い提案ができたのではと思いました。

三谷：このインスタレーションをやる前にどのテープを貼るか、何種類も貼って試しました。どのテープが一番きれいに見えて、違和感がなく、人が足を引っかけないかなどいろいろ実験したんですけど、当日、見に来られた中村さんが「元からこの公園にあったみたいな感じがする」と言われた言葉がずっと腑に落ちました。僕たちが描い

た図柄や、選んだ素材だからなのか、元からこうだったと言われても不思議ではない空間ができていたことはとても良かったと思っています。

笹尾：確かに「水辺カーペット」もレッドカーペットを歩くというよりは、絨毯敷いてくれてありがとうみたいな使い方をされてる方が多くて、使う人の行為の選択肢を広げることができていて、素晴らしいと思いました。イベントタイムという特別な時間を設けることで空間の表情が変わり、日常とインスタレーションのちょうど間の部分のいい強度の取り組みがそれぞれの場所で行われていたからではないかと思っています。
高畑：日本人はパブリック空間を使うことが下手くそだと言われがちじゃないですか。でも一日中公園に居て、その使われ方を見ていると、実はみんなちゃんと公園を使っているんだと実感できました。例えば周りでイベントやってようが、「いや俺は毎週ここで酒飲んでんねん」っていう人がいるんですよね。レッドカーペットの先で写真撮影をしているけど、微動だにせず、その先っぽを占有している。凄くハートが強いのと思うのと同時に、その人にとってその場所はどうなことがあっても自分の場所やし、周りもなんとなく受け入れていて、改めて公園はみんなにとっての場所なんだと気が付きました。

■人との距離や空気の流れを視覚化する

高畑：今回のactionはコロナ禍に行ったこともあり、それぞれのイベントで人との距離を測れる試みを取り入れましたが、当日の状況はどうだったでしょうか。
平岡：屋外ということもあってか、皆さんそれほど意識することなく、木陰など、それぞれ自分が気持ちいいと思う空間に集まる傾向がありました。

三谷：実際に1m、2mのラインを引くなかで、メートル間隔のラインが、人間の生理的な感覚からするとすごい不思議な距離だと感じました。90cmであれば一歩で行けるが、1mは一歩では届かない、なるほど、ソーシャルディスタンスはそんな違和感があるからディスタンスなんだと思いました。実際の設計においても大規模建築に携わっ

ていると、さっさとメーターモジュールで設計してしまいがちですが、メーターモジュールは人間にとって不思議なモジュールなのかもしれないということを設計者の視点として考えさせられました。

若江：「フープディスタンス」では様々な大きさのフラフープを地面に並べ、距離を可視化しましたが、そのフラフープがきっかけとなり、知らない人同士が老若男女問わず楽しんでいる光景が印象深かったです。実際のソーシャルディスタンスは取りながら、初めて会う人と人との距離感はとても近づいていたと思います。

三谷：「バルーンディスタンス」は距離の視覚化というより、屋外空間ならではの風の動きや通気性など、オープンエアをうまく視覚化してると感じました。凄く綺麗だったし、普段感じてる風ではあるけれど、目で見ると、こんなに緩やかなんだということが分かって良かったです。

■SNSでの反響

森下：actionの翌日、立松さんがSNSの状況を共有してくれましたが、SNSでの反響はどのような感じだったのでしょうか。
立松：「中之島」や「U-35」、「バルーンディスタンス」といったキーワードをInstagramなどで検索しましたが、15件くらいヒットしました。あげられている写真は、いわゆる映えそうなものが多かったのですが、例えばレッドカーペット上でワンちゃんをローアングルから構えて撮っている写真や、風船を遠目から望遠で撮っている写真など、4つのイベントすべて投稿されていました。どの写真からもイベントを楽しんでいる様子が伝わってきました。

■街＝外（そと）を楽しむきっかけに

興津：今回の7th actionを行ったことで、いつも見ている公園の景色を違う視点から見るきっかけを得られたと思います。インスタレーションを見るために橋の上など、高いところから俯瞰して見たり、いつもはただ通るだけの場所を近くで見たり。訪れた人のなかにも、同じように視点の変化に気づく人もいて、そうやっていつもと違う見方をするきっかけを与えることができ

たということは、今回大阪の魅力を再発見してもらいたいというactionの目的に対して、次に繋がる成果ではないかと思っています。水辺を楽しむという意味では「バルーンディスタンス」が一番成功していたのではないかと思っています。普段ではなかなか行くことのない水際の手摺まで人々が行っていて、他のどのイベントよりも水辺に誘うことができていた面白い仕掛けだったと思います。

立松：「バルーンディスタンス」の場所は手摺の手前にベンチがあるため、普段は座って風景を楽しむ人が多いところでした。それが手摺に風船を結わえ付ける動作がきっかけとなり、人々が水辺に近づくということが起き、公園を訪れる人々の行為を少し変えることができたのではないかと思っています。

水野：実は、当日の動画撮影のリハーサルとして、休日に「フープディスタンス」の会場で撮影を行いました。その時は良い天気にもかかわらず、ほとんど人が歩いていませんでした。それが、今回仕掛けたイベントによって、これほどまでに人の流れや、人の集まり方が変わるのかと驚きました。何かきっかけを与えることで公園や公共空間の利用のされ方が明らかに変わると実感できたことが面白かったです。

川勝：自分で何かイベントを行う際はいつも、そのイベントに来てくれた人に対して何を残せるのだろうか考えるようにしています。例えば「フープディスタンス」では、イベントが終わり、フラフープがなくなれば、あの場所でたくさんの人が一斉にフラフープを回したりする行為はできないと思いますが、あの場所が単に通行の為の場所ではなく、普段の遊び場としての利用や、イベントのような使い方ができるといことが、訪れた人の身体や感性にインプットされたのではないかと思います。この場所で何かできるかも、ここでこんなことしていいんだと思わせるようなイベントが、これから益々行われるようになり、様々な使い方が人々にインプットされ、魅力的な公園や公共空間になっていくのかなと思いました。

三谷：当日ここを偶然訪れた人は、いつも通りに公園に散歩に来たけれど、いつもと違

うことが起こっていて、その変化に「ありがとう」と思った人が結構いるのではないかと思います。公園に子どもを連れて行って、いつもと同じように遊ぶだけではなく、今日は風船で遊べたり、子どもが迷路を見つけたら、いつもと違う少し特別な時間が提供できたのであれば、社会的に意義のあることだったと思います。

川勝：このようなイベントは、デザイン行為であると同時に、場所がどういうポテンシャルを持っているか、どういうアクションを仕掛けると、どういうリアクションが返ってくるか、ということに関してのリサーチでもあったと思います。タクティカル・アーバニズム^(注1)の文脈は、スモールスケール・ビッグチェンジ、つまり、小さなことからどんどん大きな変化につなげていこうということだと思いますが、イベント当日の様子や、座談会での振り返りから、U-35委員会の皆さんがここからどういうことを引き出して、普段の設計活動に反映されていくのかにとっても興味があります。



高畑：我々のactionは、毎年アウトプットと言いながら、どうしてもインプット性が強いものが多かったと思います。そこで今年は例年とは違うアウトプットをしたいと思っていました。しかしながら、いざ始めてみると企画、運営、資金調達まで全部自分たちでやることは、非常に難しく大変でした。それでも今まで3年4年とため込んできたものを、一気に社会に対して吐き出すことができたことは、7th actionの大きな成果だと思います。更に今回のactionを通して、様々な人と繋がりができたので、その繋がりを大切にしながら、また違った形で公共に対して、社会に対して発信していけるような活動ができると良いなと思います。毎年すると息切れすると思いますので、何年かに1回くらいかなと思いますが（笑）。さらには、このようなイベントをスムーズに行う仕組みや体制づくりなども整理しながらこれからもやっていけたらいいなと思っていました。



(注1)：市民主導の都市改善運動、またその方法論。社会実験や暫定利用など「小さな変化」を積み重ねて知見を蓄積しながら、施設の建設や制度設計といった都市計画レベルののあり方に影響を与えることを目的とする。

■7th actionを終えて

今回の企画では、大阪の水辺空間「中之島公園」を舞台に、「安全・安心」に人々が集えるよう、「水都 OSAKA / 魅力の再発見」と「With/After COVID-19 時代 / 場の共有」をテーマにイベントを行いました。コロナ禍にありながら参加いただいた皆様にとって、普段とは異なる使い方や新しい発見など、「街＝外（そと）」を自由に楽しむきっかけとなればと思います。最後に、ご参加いただきました皆様、川勝様、笹尾様、カメラマン田代様、水都大阪コンソーシアムの関係者様、ご協力いただきましたメーカーの皆様に深く感謝申し上げます。（文責：出来佑也）

photo















